

ISSN 2186 – 3989

『日本詠物詩』花部注釈（4）

任 穎

The Annotation of Nihon Eibutsushi's Hana Bu(4)

Ying Ren

北 陸 大 学 紀 要
第50号(2021年3月)抜刷

『日本詠物詩』花部注釈 (4)

任 穎*

The Annotation of *Nihon Eibutsushi's Hana Bu*(4)

Ying Ren*

Received October 26, 2020

Abstract

The number of plant and animal poems which were produced in the Edo Period is very large, with many of them possessing very rich and expressive prose. In 1776, *Nihon Eibutsushi* was published. It was the first anthology of poems about plants and animals in the history of Japanese poetry. In *Nihon Eibutsushi*, the Sakura poems are in front of the plum poems. This annotation exhibits the 21th to the 40th Japanese kanshi about flowers in *Nihon Eibutsushi*. By doing so it may be observed that at the end of the Edo period, poems about flowers had begun to evolve from a Chinese style to a unique Japanese style.

Key Words : *Nihon Eibutsushi*, Edo Period, Japanese poetry

はじめに

『日本詠物詩』は、伊藤栄吉が江戸時代慶長・元和以来の詠物詩を編纂した詩集である。翌年安永六(1777)年の春に刊行された。所収の作者は 134 名で、詠物詩の作品は 545 首が見られる。また、それらの作品は 26 部に分類して収められている。詠物詩の分類や収録基準などに関しては、冒頭の「凡例」の中で、すべて清の愈長仁の『詠物詩選』に基づいたものであると述べている。

揖斐高氏は『詠物の詩—漢詩と俳諧の接点』(1998)の中で、詠物詩の特徴や日本における詠物詩の受容の状況、江戸時代中期における流行の様相などを分析した。また、『日本詠物詩』と『詠物詩選』については、主に「詠物」の意味、詠物詩の内容の面に言及したが、両詩集の具体的な内容について触れていない。また、拙稿『『日本詠物詩』花部注釈(1)』(2015)は、『日本詠物詩』と『詠物詩選』の「花部」について検討したが、『詠物詩選』と『日本詠物詩』との関係や編纂事情などについて未だ論じていない。そのため、本稿では『日本詠物詩』と『詠物詩選』の編纂事情を分析することによって、『詠物詩選』が『日本詠物詩』にどんな影響を与えたのかについて検討したい。また本稿は、前掲の『『日本詠物詩』花部注釈(3)』に続き、「花部」の第 41 番から第 50 番の作品の注釈を取り扱うこととした。

*北陸大学国際交流センター講師(天津外国語大学交流教員) International Exchange Center, Hokuriku University

『日本詠物詩』の編纂事情について

伊藤栄吉(1747-1796)の号は君嶺であり、名は栄吉、字は士善、徳川中期の福井藩の儒者である。本姓は塩田、播州北条の人である。伊藤栄吉は、『日本詠物詩』の序文で次のように述べている。「一是編部分題目一遵清愈長仁詠物詩選例、蓋愈選中吾邦未詳名物、及有其物而無其咏者、会並缺之、一是編以咏物命編、故主物不主詩、要之不必書佳詩、蓋所重在此不在彼也」¹伊藤栄吉は、『日本詠物詩』を編纂する際、清代の愈長仁の『詠物詩選』を手本として参考にしたと述べた。また、愈長仁が編纂した詩集の中で、日本に見られないものや日本に存在するがそれに関連しない詩については省略したと説明している。

それに基づき、『日本詠物詩』と『詠物詩選』の部類を分析してみると、地部、山部、水部、居処部の詩の数は相違が多いが、雑玩部、飲食部、花部、木部、草部、鳥部などにおいては、ほぼ『日本詠物詩』は『詠物詩選』と作品の数の面において、一致の傾向が見られる。

表 『日本詠物詩』と『詠物詩選』の部類比較

部類	天部	歳時部	地部	山部	水部	居處部	寺觀部	人部	麗人部	文部	武部	樂部	巧芸部	器用部	雜玩部
詩選	93首	134首	61首	50首	66首	100首	29首	39首	70首	27首	26首	64首	31首	101首	10首
詠物詩	42首	なし	3首	11首	12首	2首	3首	13首	23首	10首	3首	6首	なし	56首	9首
部類	玉帛部	冠服部	飲食部	果部	谷部	蔬部	花部	木部	草部	禽部	獸部	鱗部	水族裸部	昆蟲部	
詩選	16首	26首	34首	33首	8首	12首	135首	49首	21首	75首	33首	16首	なし	23首	
詠物詩	5首	4首	19首	10首	なし	5首	134首	41首	12首	71首	15首	12首	1首	23首	

さらに、伊藤栄吉は自分の編纂事情を『日本詠物詩』の冒頭の「凡例」の中で、このように述べている。「一愈選設歳時部、而歳時非詠物之事故是編省之、且夫愈選難以詠物命編、而各部務事該博駁雜汎濫、不純詠物、頗失選體、余不敢效之」、「一愈選設巧藝部、以収題畫及諸技奕棋鞞蹴鞠之類、是編省不別設部、而題畫盡附入于各部下、以便披覽如畫梅附梅、畫鶴附鶴是也、如諸技奕棋之類、詩不多得、得亦不佳、故令略而不録」²

この分類は、清の愈長仁の『詠物詩選』を手本として編纂したもので、愈長仁が設けている歳時部については、歳時は詠物の対象にならないと考え省いたのである。また、題画詩をまとめた巧芸部については、その内容によって他の部に分散して編入し、巧芸部を設けないという。また、花部については、以下のような考えを示した。

一花部愈選以梅力為首、而是編以櫻為首海棠次之。蓋吾邦所稱櫻者、非所謂櫻桃也、顧其穠芳豔實冠百花、故令列之於首。近世好辯者、漫以櫻為海棠、一種或以垂絲海棠充之。

詞人以故詠櫻題海棠者、往往有之、作者已命題、未可遽改姑隨³。

『日本詠物詩』の「花部」の編成を探ってみると、桜、海棠、梅花の次に、桃花、梨花、藤花など、日本に馴染みの深い花が見られる。しかし、中国の詠物詩集や詩人たちの詠花詩に良く詠まれる蘭や菊、牡丹などの花は比較的少なく、また後のほうに並べている。そこで本稿は、前掲の「『日本詠物詩』花部注釈(3)」に続き、「花部」の第41番から第50番の作品の注釈を取り扱うこととしたい。

41 龍門桃花

祇園瑜

龍門猶暢化 鳳樹自披芬
錦媛浪三級 霞深春十分
仙源勞問渡 台嶠徒尋雲
水石與花萼 天工意出群

[注釈]

- 鳳枝 鳳凰の棲む枝。杜甫「秋興」に「香稻啄餘鸚鵡粒、碧梧棲老鳳凰枝」とある。
- 仙源 神仙の居る所。俗人の行けない霊境。王維「桃源行」に「春來遍是桃花水、不辨仙源何處尋」とある。
- 花萼 花と萼、又花をいう。鮑照「樂府・詠採桑」に「乳燕逐草蟲、巢蜂拾花萼」とある。
- 天工 天然の力で出来た細工。又、技芸の巧なことにいう。趙孟頫「贈放煙火者」に「人間巧藝奪天工、鍊藥燃燈清晝同」とあり、陸游「新燕」に「天工不用剪刀催、山杏溪桃次第開」とある。
- 祇園瑜 延宝4年(1676)～宝暦元年(1751)。本姓は源。名は瑜、字は伯玉、号は南海・蓬萊などがあり、通称は与一郎。紀伊の人。江戸中期の儒者・漢詩人・画家。14歳の時から木下順庵の門に入り、同門の新井白石・室鳩巢・雨森芳洲などと交流を深めた。また、紀州藩に仕え、絵画にも秀れ、野呂介石・桑山玉州とともに紀州三大南画家と呼ばれている。著に『一夜百首』『南海先生詩文集』『南海詩訣』『詩学逢原』などがある。

42 梨花

伊藤長胤

淡淡輕風漠漠雲
東欄一樹昔嘗聞
生憎冷艷白於雪
也著月明清十分

[注釈]

- 淡淡 あっさりしたさま。淡いさま。鄭谷「中年」に「漠漠秦雲淡淡天、新年景象入中年」とあり、杜甫「行次鹽亭縣聊題四韻」に「雲溪花淡淡、春郭水冷冷」とある。
- 漠漠 布き列なるさま。一面につづいているさま。謝朓「游東田」に「遠樹暖仟仟、生煙紛漠漠」とある。
- 東欄 東の手すり。蘇軾「和孔密州東欄梨花」に「惆悵東欄一株雪、人生看得幾清明」とある。
- 生憎 あいにく。盧照鄰「長安古意」に「生憎帳額繡孤鸞、好取開簾帖雙燕」とある。
- 冷艷 ひややかな美しさ。白い花や雪などの形容。丘爲「左掖梨花」に「冷艷全欺雪、

餘香乍入衣」とある。

○月明 月が明るい。又は明るい月夜。沈佺期「巫山高」に「月明三峽曙、潮滿九江春」とあり、杜甫「秦州雜詩」に「月明垂葉露、雲逐渡溪風」とある。

○伊藤長胤 寛文10年(1670)～元文元年(1736)。名は長胤、字は原蔵、号は東涯。別称慥齋、諡号は紹述先生。京都の人。江戸中期の儒者。伊藤仁斎の長男。父仁斎の訓育を受け、父とともに京都の社交界に出入りし、仁斎の学風を受け継いだ。著に『紹述先生文集』21巻、『紹述先生詩集』10巻がある。

43 桂花

松延年

千林揺落露華涼 何意西風獨發黃
縹緲白雲憐夜色 娑娑明月散天香
小山自種淮南樹 萬里遙傳嶺外芳
高士淹留丘壑裏 攀援聊擬賞秋光

[注釈]

○縹緲 遠く微かなさま。又、遥かに広い様。李白「天門山」に「參差遠天際、縹緲春霞外」とあり、白居易「長恨歌」に「忽聞海上有仙山、山在虛無縹緲間」とある。

○娑娑 影のゆれ動くさま。

○天香 天から起きる香。よいかおり。庾信「奉和同泰寺浮圖」に「天香下桂殿、仙梵入伊笙」とあり、沈佺期「樂城白鶴寺」に「潮聲迎法鼓、雨氣濕天香」とある。

○淮南 淮水の南。淮水以南の地。韋應物「聞雁」に「淮南秋雨夜、高齋聞雁來」とある。

○嶺外 五嶺の外。高適「送柴司戸充劉郷判官之嶺外」に「嶺外資雄鎮、朝端寵節旌」とある。

○高士 志高く節を持することの堅い人。品行の高尚な人。

○淹留 とどこおって進まないこと。陶潜「飲酒」に「行行向不惑、淹留遂無成」とあり、張謂「贈喬林」に「去年上策不見收、今年寄食仍淹留」とある。

○丘壑 丘と谷。転じて、隠者の住居。『晋書・簡文帝紀』に「自足山水、棲遲丘壑」とあり、謝靈運「齊中讀書」に「昔余遊京華、未嘗廢丘壑」とある。

○攀援 よじのぼる。

○秋光 秋の景色。秋色。秋景。李涉「秋日過員太祝林園」に「秋光何處堪消日、玄晏先生滿架書」とあり、杜牧「題桐葉」に「江畔秋光蟾閣鏡、檻前山翠茂陵眉」とある。

○松延年 宝永7年(1710)～天明4年(1784)。名は延年、字は子長、号は梅岡。江戸駒込の人。平野金華に師事し、晩年は晩唐の詩風を提唱する。彼の随筆『駒谷芻言』の「詩談」に、「吾少年ノ時、蘭亭先生ニ就テ、詩ノ推蔽ヲ問」とある。彼が高野蘭亭にも漢詩を学んだ。著に『梅岡先生集』8巻、『梅岡詩草』2巻(上巻は『梅岡詠物詩』、下巻は『梅岡続草』)など詩集があり、随筆『駒谷芻言』がある。

44 桂花

釋元皓

不侍春風宴 清秋傳解顏
只應幽處種 或恐月中攀

[注釈]

○解顏 容貌やわらげる。陶潜「癸卯歲始春懷古田舎」に「秉耒歡時務、解顏勸農人」と

ある。

○幽處 静かな処にいる。また、静かな処。祖詠「蘇氏別業」に「別業居幽處、到來生隱心」とあり、常建「破山寺後禪院」に「曲徑通幽處、禪房花木深」とある。

○月中 月のなか。ここでは月中にあるという桂。高さは五百丈、其の下に一人が常にこれを切り、其の切り口がすぐに合すると伝える。『西陽雜俎・天咫』に「月中有桂、高五百丈、下有一人、常斫之、樹創隨合、人姓吳名剛、西河人、學仙有過、謫令伐樹」とある。李白「贈崔司戸文晁季」に「欲折月中枝、特爲寒者薪」とあり、白居易「廬山桂」に「偃蹇月中桂、結根依青天」とある。

○釋元皓 生没年未詳。名は元皓、字は月枝、号は大潮、魯寮など。肥前の人。

45 山中桂

田公望

不是人間種 應從月窟來
花迎山雨落 香逐曉風開
長在巖棲側 寧移玉殿隈
淮南原愛士 招隱自堪裁

[注釈]

○月窟 月中の洞窟。月中をいう。摯虞「擾鸞免于月窟兮、詰姮娥于蓐收」とあり、皮日休「吳中苦雨」に「如將月窟寫、似把天河撲」とある。

○曉風 明け方に吹く風。何遜「入西塞示南府同僚」に「露清曉風冷、天曙江晷爽」とあり、唐太宗「遠山澄壁霧」に「髣髴分初月、飄颻度曉風」とあり、柳永「雨霖鈴」に「今宵酒醒何處、楊柳岸曉風殘月」とある。

○巖棲 岩屋の中に住む。転じて、世を離れて隠居すること。謝靈運「山居賦序」に「古、巢居穴處曰巖棲」とある。

○玉殿 玉をちりばめた宮殿。玉で飾った御殿。美しい宮殿。曹植「當車以駕行」に「歡坐玉殿、會諸賓客」とあり、駱賓王「靈公觀」に「玉殿斜臨漢、金堂迴架空烟」とある。

○淮南 淮水の南。淮水以南の地。韋應物「聞雁」に「淮南秋雨夜、高齋聞雁來」とある。

○招隱 隠逸の賢士をまねきよぶ。高適「留別鄭三韋九兼洛下諸公」に「幸逢明盛多招隱、高山大澤徵求盡」とある。

○田公望 生没年未詳。字は望之、長門の人。

46 壺山老侯見惠桂花棗子

谷友信

朱實離離照醉顏 一枝兼向月中攀
應知異種傳東海 已報幽香小山滿

[注釈]

○棗子 なつめの實。又、なつめの核。

○離離 草木花實等の繁茂しているさま。左思「蜀都賦」に「布綠葉之萋萋、結朱實之離離」とある。

○月中 「44 桂花」に参照。

○異種 異なった種類、又は種族。

○幽香 奥ゆかしいにおい。温庭筠「東郊行」に「綠渚幽香注泊蘋、差差小浪吹魚鱗」とあり、王安石「歲晚」に「俯窺憐綠淨、小立佇幽香」とある。

○谷友信 生没年未詳。字は文卿、号は藍水、東都の人。

47 移辛夷十年始華

松延年

園亭移樹傍前楹 十載空聞棲鳥聲
自分淹留終舊色 何知遲暮發新榮
花心露灑湘妃淚 木末天含楚客情
不是主人能作賦 凌雲彩筆為誰生

[注釈]

○辛夷 落葉喬木の名。こぶし。山野に自生し、夏蕾を生じ、翌年の春末、白色大形の花を開く。観賞用として栽培される。

○前楹 家の前方の柱。李白「秋夕書懷」に「蘿月掩空幕、松霜結前楹」とあり、孟浩然「遊明禪師西山蘭若」に「西山多奇狀、秀出傍前楹」とある。

○棲鳥 すんでいる鳥。宿り鳥。杜甫「春宿左省」に「花隱掖垣暮、啾啾棲鳥過」とある。

○淹留 とどこおって進まないこと。陶潜「飲酒」に「行行向不惑、淹留遂無成」とあり、張謂「贈喬林」に「去年上策不見收、今年寄食仍淹留」とある。

○遲暮 年をとる。暮年。張説「幽州夜飲」に「正有高堂宴、能忘遲暮心」とある。

○湘妃 舜の二妃の娥皇・女英の称。舜を慕って湘水のほとりに訪ね、其の崩御を聞いて身を投じ、湘水の神となったという。岑參「秋夕聽羅山人彈三峽流泉」に「楚客腸欲斷、湘妃淚斑斑」とあり、盧仝「感秋別怨」に「莫似湘妃淚、斑斑點翠裙」とある。

○木末 こずえ。木の末端。『楚辭』九歌湘君に「采薜荔兮水中、搴芙蓉兮木末」とある。

○楚客 楚の地の客。李白「贈范金卿」に「遼東慙白豕、楚客羞山雞」とあり、謝榛「送客遊洞庭湖」に「相逢楚客問巴州、此去揚帆湖上遊」とある。

○凌雲 雲をしのいで高く聳える。雲をしのいで高く飛ぶ。浮世を離れて遠く世外に超脱する。江淹「別賦」に「賦有凌雲之稱、辯有雕龍之聲」とあり、王勃「滕王閣序」に「楊意不逢、撫凌雲而自惜、鍾期既遇、奏流水以何慙」とある。

○彩筆 絵具筆。絵筆。

○松延年 「43 桂花」に参照。

48 山茶花

伊藤道基

嘗隨殘草底 近徒小庭中
生意頻添葉 化機頗作叢
能持松柏節 肯受雪霜攻
况又花尤艷 不虛培養功

○生意 いきいきしたおもむき。生氣。生機。

○松柏 松と柏。松も柏も四時色を変えないから、堅固で変わらない人の節操の喩に用いる。郭璞「遊仙」に「寒露拂陵苕、女蘿辭松柏」とあり、『南史・樂預傳』に「與松柏比操、風霜等烈、豈不美邪」とある。

○雪霜 雪と霜。転じて困難をいう。杜甫「虎牙行」に「杜鵑不來猿狖寒、山鬼幽憂雪霜逼」とある。

○培養 養う。物事の発達を助ける。朱熹「鷺湖寺和陸子壽」に「舊學商量加邃密、新知培養轉深沈」とある。

○伊藤道基 天和3年(1683)～宝暦5年(1755)。本姓は清田、名は元基、道基。字は子崇、別号は宜斎である。播磨の出身。京都の伊藤坦庵に師事した。宝永6年に越前福井藩の儒官となり、藩主松平吉邦の命で、藩史『越前家御世譜』を編修した。著作に『三余清事』などがある。

49 紫微花

松延年

長夏花開百日紅 今栽掖省限西東
雲梢近護三台座 月樹高雙五帝宮
皮滑獼猴攀不達 香飛桃李艷應同
鳳池更灑朝來雨 忽奪仙郎染翰工

「注釈」

- 長夏 長い夏の日。蘇軾「司馬君實獨樂園」に「樽酒樂餘春、棊局消長夏」とある。
- 百日紅 樹木の名。紫薇属の落葉喬木。幹の高さ一丈余り。夏季、紫紅色又は白色の花を開く。
- 三台 三公。大尉・司徒・司空。三星に配す。三台の座。『周禮・春官・大宗伯疏』に「上台司命、爲大尉、中台司中、爲司徒、下台司祿、爲司空」とあり、『後漢書・劉玄傳』に「三公在天爲三台」とある。
- 月樹 月桂樹をいう。盧照隣「至真觀碑」に「栽松蒔柏與月樹」とある。蘇頌「侍宴安樂公主山莊應制」に「當軒半落天河水、遶徑全低月樹枝」とある。
- 五帝廟 五帝を祀る廟。五帝は小昊・顓頊・帝嚳・帝堯・帝舜である。
- 帝宮 天帝の宮。又、帝王の宮。潘岳「悼亡」に「誰謂帝宮遠、道極悲有餘」とある。
- 鳳池 禁中に在る池の名。鳳凰池の略。中書省が其の滸に在るので、転じて、中書省をいう。李白「流夜郎贈江夏韋太守」に「君登鳳池去、忽棄賈生財」とある。
- 仙郎 仙人のこと。「剪燈餘話、連理樹記」に「縱令肯作仙郎伴、其奈孤山處士何」とある。
- 松延年 「43 桂花」に参照。

50 娑羅花

釋敬雄

春過群芳歇 夏深汝獨妍
西天何日出 東海幾時傳
帶露幽姿膩 含風香氣鮮
垂枝從變白 猶自近經筵

〔注釈〕

- 西天 西方の空。
- 東海 東方の海。
- 幽姿 たおやかなすがた。謝靈運「登池上樓」に「潜虬媚幽姿、飛鴻響遠音」とあり、朱熹「秋華・菊」に「青蕊冒珍叢、幽姿含曉露」とある。
- 經筵 天子が經書の講義をきこしめす席。經書を講ずる席。
- 釋敬雄 正徳3年(1713)～天明2年(1782)。号は金龍、茶翁であり、字は韶鳳である。著に『雨新庵詩集』『道楽庵夜話』『濃中風藻』などがある。

注

¹ 伊藤君嶺『日本詠物詩』国会鸚軒、安永 6 年版を使用した。p.8。

² 同注 1

³ 同注 1

付記：本稿は筆者が北陸大学国際交流センターの交流教員として所属している際、執筆したものである。また、本稿は天津市哲学社会科学规划青年項目「中国古典詩歌対江戸時期日本詠物詩集的影響研究」(TJZWQN18-005)の段階的な成果である。

参考文献

富士川英郎他編『詞華集・日本漢詩』汲古書院,1984.

猪口篤志『日本漢文学史』角川書店,1984.

森忠重『和漢詩歌作家辞典』みずほ出版株式会社,1972.

揖斐高『江戸詩歌論』汲古書院,1998.

兪長仁『詠物詩選』四川省新華書店,1984.